

D-pangLife (the first half)

青輝 ひづき

腕の中で眠る少女の身を、そっと木陰に横たえる。その安らかな寝顔を見て彼は、眉間に寄った皺をほんのわずか綻ばせた。

しかしそれも束の間、すぐに目つきを険にし、眠る少女を背にする。木々の影が落ちて薄暗い周囲から感じられる殺意は三、四、五……七。一、二度確認を繰り返し、敵は七人だと確定する。ここでの抜け目は、そのまま破局へと直結するが故に、欠片の油断も許されない。伏兵の存在も考慮に入れつつ、少女から歩幅にして十余りの距離を置く。この距離を半径とした円の周が、そのまま彼の護るべき境界線に重なる。

半時の後、彼の目前に四つの人影が現れた。二人は地に、二人は側面の木の枝に。皆同一の真っ白い制服を纏っていた。

(少し離れたところから二人……言伝役に一人……。優秀な指揮官だ)

敵を見縊らず、自分たちに与えられた指令を最も適した手段で忠実にこなす。ただの賊にはない、統率された意志と揺るがぬ正義。彼らに問答は無用。ただ確固たる

目的を遂げるのみ。

それは、彼にとっても同じことだったが。

「おしゃべりは……いらんな。今更人違いということもあるまい」

彼と最も近い場所に位置していた壮年の男が、その容姿に見合う重低音で語り掛ける。おそらくはこの隊の長。相對する彼は返答の代わりに腰の剣を抜いた。細身で両刃の刀身は鈍い輝きを放つ。

それに合わせたように指揮官も腰の剣を抜き、他の部下たちも各々獲物を取り出す。徒手の者はおそらく魔術師の類。

指揮官の持つ大型の剣も含め、白装束たちの剣は刀身が煌めくように澄んでいた。彼の持つ無骨な剣との格の違いを主張するように。

「散！」

男の命令と同時に、姿を見せていた四人が一斉に木陰に紛れた。

紛れようと、した。

しかし男は身を潜める刹那、確かに見ていた。一瞬前まで自分の隣に立っていた仲間の上半身と下半身が、真つ二つに分断されたのを。

そして同時に、確かに見えなかつた。いつ彼が部下との間合いを詰めていたのかが。

男は木陰から、数刻前まで自分がいた辺りに目を向け

る。目に映るのは横たわった仲間の死体だけ。目標となる彼の姿は掻き消えていた。

状況を確認するため、息を潜め耳を澄ます。複数の足音がする、木の葉の擦れる音もする。戦いは確実に始まっている。

だが、男にはこの戦いが何か違うと感じていた。何か足りない……何かが……。

それが何なのか気付いたとき、男は知らず身震いしていた。目を開け活動を再開する。とにかく敵を見つけて出さなくてはならない。

木々の間を縫って駆ける。仲間へ声をかけるような真似はしない。迂闊に居場所を教えることはできない。

ややあって、進行方向の右手に大きな火の手があがった。爆音が森を揺らす。体を木々に擦り付けるように隠しながら、可能な限り早急に火元を目指す。

炎の舞う中で、男は同じ制服を身に付けた人影に目が留まった。最大限周りに注意を払いながら、息を荒げている仲間の傍に寄って行く。

「大丈夫か?！」

男は仲間の魔術師を背に庇いつつ、周囲に目を凝らす。魔術師は一瞬安堵の表情を浮かべ、しかしすぐにまた険しい表情に戻る。

「私は大丈夫です！ しかしヤツをやった手応えはありません、気をつけてください！ それから……他の仲間

たちの生存は絶望的、かと」

後半の報告を聞いても、男はあまり動揺しない。とうより、既にそのくらいの想定はしてあった。

この戦いで感じている違和感。それは金属と金属のぶつかり合う音がないこと。剣と剣が切り結ぶ音がしないこと。

この作戦に当たって、油断も慢心もなかった。あったのは厳然たる――

「隊長！」

「ちいっ」

部下の声と同時に、男は右手の剣を目前に掲げた。炎の壁を突き抜けて、真正面から彼が踏み込んでくる。タイミングは外れていない。

男と敵の剣が激しくぶつかり、

ボギャンと音を立てて、

男の剣が砕けた。

そして、そのまま男の左肩から先が切り落とされる。

「ぐあ」

それでも彼は止まらない。四肢の一つを失った激痛から思わずよろめいた男の隙間を縫い、彼の刺突が背後の魔術師の脳天を貫いた。

そのまますり抜けた男の左側から、間髪を容れずに逆薙ぎの刀身を打ち込む。

（我々には油断も慢心もなかった。あったのは厳然たる

力の差、か……) 回転する視界を瞳に映しながら、男はそう結論付けたのだった。

その青年は必死で走っていた。行く手を遮るようにつ無数の木々が心底鬱陶しい。

青年の役目は言伝。所属する隊の作戦推移を事細かに組織へ報告する役割である。

だが彼が今、死に物狂いでこの森を抜けようとしているのは、その使命感や志に突き動かされてのことではない。彼はただ単純にあの地獄のような場所から一刻も早く離れたかっただけである。

仲間は皆死んだ。隊長も副隊長も皆殺された。彼が今生きているのは、たまたま彼がその若さと未成熟さ故に言伝に任せられ、討伐目標からもっとも離れた位置で待機していたからに過ぎない。自分がヤツと対しても即座に殺されるだけだろう。その程度のことには嫌でも理解できる。

だが、どうしてもその胸の内に渦巻くものは抑え切れない。

「どうしてオレたちがこんな目に会うんだよ！ オレたちは正しいことをしてるんだろ？ この世界のために戦ってるんだろ?!」

不当、理不尽、不条理。そういった自分とは関係のな

いモノに自身が脅かされるやるせなさ、後から後から湧き上がってくる。

「どうしてなんだよおおおつ!!」

理性は、ここで叫んでもどうにもならないと告げている。むしろ状況が悪化するだけだと。だが感情が、それらを黒く黒く塗り潰していく。

「オレたちが間違ったことをしてないって言うなら、アイツは、アイツは、アイツはああ——つがあ?!」

体の中心が燃えるように熱くなった。そして急激に体が重くなっていく。手が動かない、足が動かない、呼吸もできない。あらゆる感覚が彼方へと遠退いていく。

崩れ落ちていく視界のなかで、青年は自分の胸から細い一本の剣が生えているのが見えた。どさりと、まるで自分が人形にでもなったかのように何の抵抗もなく地面へと叩きつけられる。

痛みは感じない。音も聴こえない。ただ狭まっていく視界のなかで対照的に大きくなっていく影に、無限の呪詛を送り続ける。

悪魔、悪魔、悪魔、この悪魔め……。

最後の七人目を片付けた彼は、投擲した剣を死体から引き抜くと、その血糊を振り払った。無論たったそれだけで七人分の血糊が完全に取り除くことはないが、大して気にした風もなく彼は鞘へと剣を収める。

ふと、彼は視線を彼方へと向けた。  
そのまま数刻。しばらくその場に佇んでいた彼は、急に興味を失ったように身を翻す。

そろそろ目を醒ますであろう少女の下へと歩を早めた。

「ごめんね、エン兄。また私急に眠っちゃったみたいで……」

申し訳なさそうに謝る少女の頭に右手を乗せながら、エン兄と呼ばれた青年はわずかに首を横に振る。

「気にしないでいい。旅の疲れが溜まっているんだろう」  
「そう言いながらくしゃくしゃと少女の長い髪を撫でる。驚くほど赤い、寶石のように綺麗な髪だった。気恥ずかしそうにしながらも、少女に嫌がっている様子はない。大きく丸い金色の瞳を細めながら、少女は言葉を続ける。」

「疲れ、なのかなあ。でもでも、この一年はとっても楽しかったよ！ 見たことないものいっぱい見れたし、聞いたことないものいっぱい食べれたしね」

「そう言いながら青年の胸に顔を埋めていく。彼のほうも何も言わずに少女を受け止める。」

「本当に……とつてもとつても……楽しくって……毎日が夢みたいで」

青年の背中に回された少女の腕は、微かに震えていた。

「私だけこんなに幸せでいいのかなって、ときどき不安になっちゃうくらい……」

「そんな大袈裟なことじゃ、ない」

慰めるようにあやすように、ぽんぽんと頭を撫でた。

「彼から胸に顔を押し付けている少女の表情はわからないが、満ち足りた表情をしていればいいと思う。」

「そう、切に願う。」

「ねえ、エン兄」

「しばらくして、名残惜しそうに青年の胸から顔を離すと、少女の真剣そのものの目と、青年の、やや長めに切り揃えられた髪と同じく真っ黒な目が見つめ合う格好になった。金と黒の視線が交錯する。」

「ちゃんとお洋服洗ってる？」

「……は？」

「ちゃんとお洋服は洗ってるのかって訊いてるの！ 汚れてないなら洗濯しなくてもいい、なんて考えてないよね?!」

「……ま、まあ気が向いたときには」

「気が向いたときい？ なら気が向かなかったら洗わないってこと?!」

「いや、それは、なんだ、その……」

「もう、しつかりしてよ、エン兄！ 人の匂いって結構染み付いちゃうものだからね！ よし、次の街に着いたら早速質のいい石鹸を買って上から下まで全部洗っ

「ちやお！」

「い、いや、何も無理に」

「い・い・か・ら！　そうと決まったらすぐに出発ね。ほら、早く早く！」

勢い良く立ち上がり、これまた勢い良く青年の腕を引っ張って立たせた。まごついていてる兄貴分を差し置いて、ひとりですんずんと歩いていく。

呆気にとられていた青年がようやく足を踏み出そうとしたとき、随分先を歩いていった少女がすたすたと彼のところに戻ってきた。

「レイ？」

なぜか俯きがちに戻ってきた少女から、ぼそぼそとはつきりしない音が漏れている。

「……レイ？」

もう一度青年が名前を呼ぶ。

なおも地面とにらめっこをしている少女から、今度は辛うじて聞き取れる程度の小さな小さな声が聞こえてきた。

「……とりあえず、お昼ご飯、先に食べよっか……」

青年は思わず天を見上げる。

太陽が真上に昇るまで、まだもう少ししばらくありそうだった。

その世界は壊れかけている。比喩でも誇張でもなく、ただ一つの事実として。木は枯れ、水は澱み、風は風ぐ。魚が死に、動物が死に、人間が死ぬ。遠くの海は闇色に染まり、彼方の空には切り取られたような真つ白い区切りが見えた。

始まりは誰も気づかないほどささやかな変化。しかしその変化は時を経るごとに加速度的に拡大していき、高い山頂から見下ろす下界の景色は、今や一日とて同じ様相を呈さない。

確実に、急速に崩れ落ちていくなかで、その二人は生きていた。人間の髪とは思えないほど綺麗な赤色をした長髪を靡かせて歩く少女、レイチェル。そのやや後ろを歩く、長身瘦躯でこれまた背中の中程まで届きそうな長い黒髪を簡素に束ねている青年、エンデュミオ。

彼らは旅をしていた。目的地も、やらねばならぬこともない、気ままな二人旅。いろいろな土地を巡り、いろいろな景色を眺める。レイチェルを旅に誘ったのはエンデュミオのほうだったが、しかし彼の、旅自体への関心はさほどないようだった。少女の気の向いた方角に足を揃えるだけで、自分の希望は特に話さない。最初の頃は少女も不審に思っていたが、幾度となく「世界を回る」と自体が旅の目的」と断言されてきたので、今はもう深く考えることなく自分の好きなように歩き回っていた。青年もそれが一番だと言うように、何の不満も漏らさず

に彼女に付いていく。

森が開け、少し先に比較的大きめの街が見えてきた。

「街発見！ 石鹼石鹼」

ともすれば駆け足になりそうな少女の背中から一声。

「おい、髪、束ね忘れてる」

慌てて足まで届くほど長い髪をリボンで纏めながら、

ジト目で後ろを振り返る。

「……別に、そんなに目立たな」

「目立つ」

今まで飽きるほど繰り返してきた何度目かの文句を、同じく何度目かになる即答で打ち切られた少女は、ぷいとそっぽを向いて頬を膨らませる。不自然なほど足早になつて先を急ぐ少女の後ろ姿を眺めながら、対照的に青年は歩を緩めた。天を仰ぎ見る。

欠けた空をその瞳に映す彼は、一体何を思い、何を望むのか。どんな未来を願い、どんな幸福を思い描いているのか。

あてどもない旅は、行き着く場所を先送りし続ける。あと少し、あともう少しだけと祈るから。



「まさか、三〇二小隊が全滅とは……」

「集団戦闘に不利な森でのことと聞く。きっと巧く裏をかかれたのだろう」

「だが」

「……無駄話は、そこまで」

二十人ほどが顔を突き合わす会議の場において、その声はさほど大きくもないのに凛と響いた。瞬く間に辺りを静寂が支配する。周りが静まったのを確認してから、この円卓の会議室における唯一の女性は二の句を継いだ。「貴方がたに集まっていたのは井戸端会議を行うためではありません。我々に与えられた勅命を遂行する作戦を伝えるためです」

「し、しかし」

口を挟もうとする男を、しかし女は一瞥しただけで黙らせた。この場にいる誰もが理解していた。ここで最も上位の存在は誰なのかということ。

再びの沈黙のなかで、女は一度切った言葉を続ける。

感情を込めない、至極平淡な声音で。

「……そんなにあの者の評価が気になるのなら私見を述べましょう。あの者の力は、往古に名を連ねる三騎士に比するものです」

一瞬前までしじまのなかにあった会議室が、まるで津波のようにどよめいた。あちらこちらから男たちのヒステリックな声が鳴り響く。

口々に言葉を並び立てる男たちに囲まれながら、女はひとり冷静に座していた。熱が治まるまで、ただじっと噤む。

「……それは、真でしょうか？」

やがて訪れた小雨のようなざわめきのなかで、野太い男の声が女に投げかけられた。その声を合図にしたかのようにそここの小声も静まった。この場にいる誰もが、女の返答に傾聴する。

「ええ。実際に遠くから戦いを観察していましたが、あの者の剣技は少なくとも当代では無双でしょう。さらに気配を知覚する感性は卓絶しており……」

そこで一旦言葉が途切れた。

周りの男たちが誰一人気づかないなかで、会議が始まってから一度も言葉を発さずに女の背後に佇んでいた青年だけが、ただ一人それを目にした。

膝の上に置かれた女の右手が、わずかながら震えていた。

自分は遠くから観察したと言った。それは事実。だが対象との距離は実に山二つ分。千里眼を用いて遙か彼方から視ている自分の気配に、対象は間違いなく感づいていた。最後の一人を殺し終えてこちらを向いたあの男の目が頭から離れない。二つの山を間に挟みながらも確かに感じた恐怖が忘れられない。あの時の悪寒が今もまだ自分を苛んでいる……。

「クヴィン様？」

会議に参加していた誰かの声で、ようやく女は思考の檻から抜け出した。机の下で、無意識のうちに左手が右手に添えられる。

「……失礼しました。とにかく、あの者と対等に戦える者などこの世におりません。無論、この私も含めて。三騎士に並ぶ剣技と、生半可な魔術など即座に消し飛ばす、強靱な意志に裏打ちされた対魔能力。世が世なら、立場が立場なら、英雄と称されるべき力と知性を有した器であると断言できましょう」

さらにこう付け加えた。

「そして先ほどの狼狽ぶりを見るに、どの方もあの者の能力を致命的なまでに過小評価しているご様子。それでは、ただ闇雲に兵たちの命を散らせるだけ」

会議に参加していた誰もが、苦虫を噛み潰したように顔をしかめていた。水瓶に真つ黒な墨を垂らしたように、ゆっくりと会議室に絶望と焦燥感が満ちていく。

「……ではもう、我々の世界は、終わりなのですか……？」

誰かが呟いた。問いかけと呼ぶにはあまりにも弱々しい声。それはこの場にいる全員の悲愴な想いを代弁する、たった一つの言葉だった。

「……。ミルゲイ・ロラント小隊長。我々に与えられた勅命は何ですか？」

「……は？」

突然名指しされた三十歳前後の小隊長は、脈絡のない質問に戸惑う。周りの男たちも、質問の意図が理解できずに何の反応もできない。

「……我々の任務は？」

もう一度女は短く尋ねた。ほんの少しだけ語気が荒くなつたようにも感じられる。

「は、はい！ ええ……あらゆる障害を排除し、壊世の神子を屠ること、です」

ようやく返ってきた答えに何の反応も示さず、そのまま他の人間たちの顔を見渡す。

「今の言葉に、異議がある方はいますか？」

男たちの中から発せられる言葉はない。それが自分たちに与えられた勅命であることに、微塵の疑いもなかった。

しばらく間を置いた後、女は小さく息を吐き出す。常日頃傍に控える青年には辛うじて、それが彼女の「溜め息」なのだと判別することができた。

「……なるほど、わかりました。少し回りくどいことをしてしまつたようです。

結論だけ申しましょう。我々の目的は『壊世の神子を屠ること』です」

男たちは一様に首を傾げる。先ほどの小隊長の言った言葉と何が違うのか。

「わかりませんか？ つまり我々の目的はあくまでも壊世の神子の殺害。『あらゆる障害を排除』することが目的なのではありません」

男たちの表情に少しづつ理解の色が見えてくる。だがその表情はすぐに疑念へと変わっていった。

「無論当初は壊世の神子のみを狙っておりました。ですがあまりにも護衛の妨げが……」

「そこなのです。そこで『先に障害を取り除く』と方向づけたのが、最大の誤りだったのです」

反論に応じる声にも一切の淀みがない。当たり前のこととを当たり前だと告げるように。気負いも着飾りも一切なく、女の声は澄み渡っていた。

「……果たしてあの者を下さず、目的が達せられますか？」

その言葉には、今までで最も重い響きが含まれていた。皆の真剣な視線が女に集まる。

それらの重圧にまるで動じることなく、女は淡々と告げた。

その言葉は音量としてはか弱く思えるほど小さく、しかし戦乙女の鬨の声にも劣らぬほど男たちの胸の奥底で響いていく。

「そのために、私はここにいますのです。」

しかし覚悟を決めてください。この作戦に懸かっているのは我々の命だけでなく、この世界の命運そのものな

のです。『次』はありえませんが。失敗は破滅に直結します。  
……さて、覚悟は定まりましたか？  
では始めましょうか。世界を救うための戦いを」



「いい街だったね！　こんなに長くひとつの街にいたの、  
久しぶりだね。どのくらいいたっけ？」

「一週間、だな」

隣ではしゃぐ少女を眩しそうに眺めながら、エンデュ  
ミ才はそう答えた。そして彼自身もレイチエルの評価に  
異論はない。心地よい、いい街だと思った。それは未知  
なるものに対する新鮮な驚きというより、久方ぶりの故  
郷に舞い戻ったときのような郷愁の念に似て。

「なんだか似てるなって思った。アルーニヤの村に」

「ああ」

「家の建て方とか、食べ物の味とか、人の、温かさ、と  
か」

そう言いながら少し手前を歩く少女の表情を、後ろの  
彼から窺い知ることとはできない。彼にできることはただ、  
彼女が幸福たれと祈ることだけ。

「……ああ」

さらさらと左右に遊ぶ赤い髪を目に映しながら、青年  
の思考は過去へと向かう。時間的には一年ほど前の、感  
覚的には遙か昔の『故郷』へと。

「レイを、お願いね」

そう言った彼女の想いはどのようなものだったろう。

「……娘を頼む」

村の外から来た、素性も知れぬ男に愛娘を託さねばな  
らぬ彼の辛さは、どれほどのものだったろう。

「主よ、どうか旅立つ二人に加護を………否、どうか

この二人に、あなた様のお力を届けよう………」

遠くない未来、確実に滅びへと向かう村人たちは、旅  
立つ二人にどんな祈りを込めたのだろうか。

男はこの村で生まれた者ではない。村人に素性を語る  
気はなかったし、語るべきでもないと考えていた。少年  
兵として任務の只中であつた彼が大怪我を負って辿り着  
いたのがこの村。故郷のない彼に、故郷のぬくもりを教  
えたのがこの村だった。

思えば、少年兵として在り、怪我を抱え、この村に行  
き着き、一命を取り留め、傷が癒えるまでこの村に居た  
こと、居られたこと。その全てが運命だったと言えるの  
かもしれない。

おそらくはきつと、彼女に恋したことまで。

初めはただの小さな小さな少女にしか映らなかつた。

村の外からやってきた自分を珍しが、小うるさい子供に過ぎないと。それなのにその子供は、傷が完全に癒えるほどの時間が経っても、自分から離れていかなかった。他愛のないおしゃべりをしては、また明日と言って帰っていった。子供らしい遊びなど何も知らなかった自分に、何がおもしろいのか一所懸命遊びを教えようとしていた。気づけば、自分が、離れられなくなっていた。

彼女が村に居着く理由になり、寄る辺のない自分の生きる理由になつた。

戦うことしか知らない自分が、戦わずに生きていくのもいいと思えた。どこの馬の骨とも知らぬ余所者を迎えられる、甘く弛んだこの村人たちとともに老いて死んでいくのもいいと、本気で思えた。

だからこそ、破滅の託宣が降りた時、彼は少女のために全てを捨てる覚悟ができた。

村にただ一人住んでいた牧師が、痛ましそうに預言を告げた。世界を破滅に導く神子がいる、その者は蛇のよう長い真紅の髪を持っている、と。

出逢った頃は同い年の少年と大差ない髪型をしていた彼女は、いまや炎のように真っ赤な長髪の似合う少女になつていた。何度切つても翌朝にはすぐに元の長さに戻るその赤髪を見て、村人たちはいやでも認めるしかなかった。彼女こそが世界に破滅をもたらす壊世の神子なのだ。

だと。

最も信じたくなかつた彼は、しかしその力故に誰よりも確かにそれを痛感していた。彼も元は神の御許に身を捧げていた戦士。気づかぬわけがなかつた。彼女を中心に、狂つたように崩れ落ちていく世界の『源』に。

村の誰も、彼女を恨まなかつた。彼女の笑顔は、その村の宝だつた。滅びるのならそれでも構わない。それまでありふれた日常を続けるだけだ、と。

少女には託宣の件は秘匿された。そうしなければ日常が日常でなくなってしまう。ただひたすら素直に、近づく滅びを受け入れよう。彼女の知らぬ間に、たつた一人の少女のために滅びゆく世界を眺めていよう。

ただ一人、この村で生まれなかつた青年だけは違つた。彼女の見ていない風景がある。彼女の聞いたことのない音がある。これから滅びゆく世界には、彼女の知らぬものが無数に存在すると、そう叫んだ。自分が護るから、他のあらゆるものを犠牲にしても、彼女だけは護り切るから。だから彼女を連れて世界に出たいと、彼女の笑顔を見続けさせてほしいと、心の底から彼は請うた。

誰一人としてその申し出を拒む者はいなかった。

出立の前夜、少女の眠る家の前で、青年は村人たちの最後の言葉をただ黙って聞いていた。彼女の禍つ力がこの村に与えた影響は決して小さくない。今更彼女がこの地を去つたところで、他のどこよりも早く世界から失わ

れることは確かであろう。であるが故に、彼は何も言わず、ただじつと声に耳を傾ける。

東の空が白んでくる。旅立ちのときが近づく。

神にも悪魔にも祈らない。ただただ強く、切に、さやかに望む。

どうか、彼女の最期は安らかであれ、と。

少しの間再び森を進んでいた二人の前に、一風変わった無骨な岩の連なりが現れた。植物は巨大な岩の陰にひっそりと生えるわずかばかりの雑草のみ。生命の息吹というものがほとんど感じられない、荒涼とした大地だった。

そんな大地の上にあっても、少女の瞳はきらきらと輝いていた。

「ほらほら見て見て、エン兄！ 水平線が見えるよー」

右手を臉の上にかざし、彼方を見つめるレイチエル。楽しくて仕方がないといった様子の声に、エンデユミオが溜め息混じりに答える。

「……地平線、だろ。海じゃないんだ」

「おお、そっか。地平線地平線ー」

再び溜め息をつく青年。気を紛らわすかのように辺りに視線を移した。

(……しかし)

嫌な場所だ、と思う。あまりにも遠目が利きすぎる。見晴らしが良すぎるのだ。ひとつひとつの岩こそ大きいものの、樹木のように林立しているわけでもなく、少し高い位置から見下ろせば簡単に人を確認できる。いざ戦いとなったとき、護るべき対象の居場所が知られやすいのは致命的と言える。

無論、今までも一対多に向く森でばかり戦っていたわけではない。もつと見晴らしのよい草原で立ち回りをしたこともある。

だが今はあの頃に比べ、格段に敵の警戒も強くなっている。もう小手先の兵を用いることはありえない。世界の方々が崩れかけている現在、向こうは世界のバランスを保つために多くの兵力を割いていることだろう。いかに世界の命運を握る討伐部隊といえど、戦力は決して十分でない。

だからこそ、危うい。追い詰められた獣は、力を誇る獅子の何倍も手ごわく、賢しい。一瞬の油断で全てが終わる。

それでも怯まず、脅えず。ただ向かってくるものを全力で排除する。不純物は要らない。要るのは力だけ。

腕を失ってもいい。脚が千切れても構わない。口から音が出なくても、瞳が光を失っても。傍らの少女を護ると決めたから。そのために、そのためにだけに生きているから。

だからもう少しだけ、彼女の笑顔と共に――。

気配が近づく。

明け方近くの薄闇の中で、間違いない自分たちを中心にして輪を描いて近づいてくる。無数の殺意。出来る限り正確な数を割り出せるよう、息を潜めて感覚を研ぎ澄ます。

傍らには、自らの身に迫る危険など露とも知らぬようなあどけない寝顔をした少女。

(改めて術をかける必要はない、か)

そう判断し、エンデュミオは剣を片手に立ち上がった。環状に散る気配は、焦るでもなくゆっくりとその包囲網を狭めていく。そのうちに、環のなかで特に層の厚い部分が突出して自分たちに近づいてきた。他の気配にも十分留意しつつ、彼はその突出した部分へと進路を向ける。

歩幅にして十。レイチェルと自分との間に絶対枠を画す。何人も侵入を許されない、断絶された空間。

その境界線へと、気配が近づいてきた。先頭が二人、少し後ろに六人。一人を除き、それぞれ並でない技量を有していることがわかる。決して質の良い地面とは呼べない周囲を、淀みなく気配を移動させている。即座に対応できるよう、半身を開いて腰を落とす。剣の柄に手を

かける。

やがてぼんやりとした人影から、はっきりと顔を視認できる位置まで気配が近づいてきた。

数はやはり八人。だが一人だけ、妙に背丈の低い者が混ざっている。しかも周りを屈強な者たちに囲まれているとはいえ、集団の先頭に立っている。格好から判断するなら神官。さらには、

「オルナ・クヴィン・レッドスピリッツ。この中隊の指揮を任されています」

女。その紛れもないソプラノを聴き、エンデュミオの理性はほんのわずかに漣さざなみを立てた。しかしそれは、敵に女が混ざっているからという瑣末な理由からではない。(間名持ちだと……? しかも第五位。このタイミングでのジョーカー、巧妙だな)

自分がいかに危地に立たされているかを実感しつつ、しかしすぐに自分の起こすべき動作を思い描く。女との距離は踏み込みにしておよそ五歩。一撃で仕留められるとも思えないが、体運びを見る限り近接戦闘に向いているとは考えづらい。うまく先手をとればフォローに入るだろう二、三人をまとめて行動不能にできる。

相手に気づかれないよう、ゆっくりと全身の筋肉に力を込めていく。タイミングを計り、一気に――

「挨拶もせずに入殺しですか、エンデュミオ・ハサルウェイ」

不覚にも、一瞬だが彼の動きは完全に止まった。それがわからぬほど愚鈍な兵たちとも思えなかったが、女を護るようには控えている彼らに動く気配はない。

「……ふん。用意周到だな、クヴィン殿。よくそこまで調べたものだ」

軽口を叩きながら、同時に彼は次の一手を精討する。この相手はマズいと、頭のどこかががなり立てていた。

ハサルウェイの名は、レイチエルも含め、彼女の村の誰もが知らない情報のはずだった。なぜなら彼女の村に着いてから、一度たりとも口に出さなかった名なのだから。

知っているとすれば、それは十年近くも昔の教皇庁を知る者くらい。

「貴方ほどの者を相手に立ち回るので、やり過ぎということはありません」

「……」

それには答えず、じつと正面の女を凝視する。

年齢の程はおそらくレイチエルより少し上、自分と同じかやや下くらい。身長はレイチエルの、というより平均的な女性のそれを遥かに下回っている。小柄な体に不釣り合いなほど大きな帽子から出ている前髪は銀色で短く、琥珀色の瞳が逸れることなく真正面から彼を捉えていた。確かに立ち居振る舞いにはわずかな隙も見え隠れしている。だが、どうしても一歩目が踏み込めない。

「……あなたは一体自分が今何を護っているか、理解しているのですか？」

とそこで、今まで一言も発さずに女の隣に控えていた男が声を上げた。首筋を覆う程度のやや長めの金髪に細い眼鏡をした、武術よりも学術に秀でたような出で立ちの青年だった。だが細身の体からは、尋常ならざる闘気が滲み出ている。

「あなたの行いは、この世界の全てに対する裏切りの行為です」

従者の勝手な発言にも、神官オルナは大した感慨を持ちえなかった。ただエンデュミオの様子だけをつぶさに観察する。

「それをわかっているのなら」

「……囁るな」

苛立ったからというより、単に話しっぱなしにさせておくのが面倒になったとでもいうように、黒髪の騎士はゆつくりと言葉を続けていく。説き伏せるでも怒りに任せるでもなく、ただ淡々と。

「……別に正義を語るつもりはない。一人の少女を犠牲にした上で成り立つ世界に意味はない、なんていう偽善も持ち合わせていない。むしろたった一人の命で世界全体が救われるのなら、こんなに合理的なことはないだろう。俺にはお前らの行動を肯定する理由こそあれ、否定する言い分はない」

その予想外の言葉に、金髪の青年はつい言葉を詰まらせる。隣のオルナの表情に変化は見取れないが、その心の中はいかなるものだろうか。

「そ、そこまで断じて、なぜ……」

「大切だからだ。あいつが、この世界の何よりも。俺は世界を破滅に追いやる悪で、お前らはそれを救う正義。それが唯一にして疑いようのない真実」

「……ならば」

従者の言うに任せて黙っていた女神官が跡を継ぐ。

「自分のために人殺しを重ねる貴方の姿を見て、レイチエル・マトスは喜ぶと？」

「……見せたことはないが……ま、喜びはしないだろうな。ほぼ間違いない」

「……。本人が望みもしないことを、貴方は一人で勝手にやっている」

「……。本人も望まないからこそ、だ。それどころか、自分がこの世界を狂わせている元凶だと知ったら、あいつのことだ、喜んで命を投げ出すだろう」

だからこそ、だ。この世界の誰からも疎まれて、自身でさえ自分を厭う。そんなヤツに一人くらい味方がいても不公平じゃないだろ。例えばあいつが望んでいないとしても、俺はあいつに、レイチエルに生きていて欲しい。生き続けて欲しい。笑っていて欲しい。

そのために俺はどんな罪でも背負おう。どんな罰

でも受けよう。

……ああ、そうだ、そうだった。足踏みする権利なんて、俺には元からなかったんだ。はは、会話で立ち位置を思い出すとは、我ながら甘い。

おしゃべりが過ぎたな。さあ、存分に殺し合おうか。

——世界を、賭けて」

裂帛の気合とともに、エンデュミオは一直線にオルナへと迫った。完全に防御を捨てた必殺の一撃を、辛うじて反応できた傍らの青年が遮る。だが受け止めはしたものの、その勢いを殺し切ることは叶わず、体の軸が大きく揺らぐ。その致命的な隙に見向きもせず、間合いを取ろうする神官へとなおも追い縋る黒髪の騎士。だがこれには他の六人もなんとか反応でき、彼の行く手を阻むように殺到する。

金属が互いにつつかり合う音、剣が風を切る音、地面の擦れる音。七人を同時に相手にしながら、しかし戦況は圧倒的にエンデュミオが優勢だった。卓越した剣技は留まるところを知らず、誰一人としてまともに打ち合うことすらできずにいた。

だが、それで十分だった。十秒と持たず一人欠けたところで、彼らの意志は微塵も揺るがない。自分たちと与えられた役割に全てを賭す。死を怖れる余裕すらなかつ

た。一秒でも長く目標をこの場所に縛り付けることが、最も優先されるべき事項。

「五芒の璽・万象を・ぎす 其は大なる鎖・其は魂を囲う 蠅の・」

中空に浮かぶオルナの口から、朗朗と響き渡る旋律が紡がれた。それは世界を救うための、無慈悲で冷たく、清澄なる謡詠。

反逆の騎士に向け、四方から青白い光が結集する。離れた場所に陣取っていた者たちの役目に思い至ったとき、既にエンデュミオは女神官の術に囚われていた。

四肢に絡みついた固形の光が、意識ごと体を大地へと引き寄せる。一瞬でも気を抜けば、即座に奈落へと墮ちて行きそうな重圧のなかで、途端に鈍る剣の刃え。

「……よし」

彼を足留めていたうちの一人が安堵の息を吐く。他の者たちも伝染したように気を弛め――

「なりません！」

オルナの必死の声の木霊するなか、二人分の上半身が宙に舞っていた。

今や残すところ四人となった戦士たちのなかから、たまらず叫び声が聞こえる。

「そんな馬鹿な?! 一体何人分の魔力を喰らったと思っ  
つてやがる！」

確かに黒髪の騎士の動きは、先程までとは比べ物にな

らないほど鈍く重いものとなっていた。

だが、それでもなお。依然として彼はこの場の誰よりも強かった。

「化け物があ！」

いくら力の差を感じたとて、彼らにも絶対に引けぬ理由がある。すぐに体勢を立て直し、全力で彼を押さえ込む。彼に最も迫る金髪の戦士でさえ、今や肩で息をすることを隠し切れない。

（早く、早く……彼らの命が尽きる前に……一秒でも早く、この術を）

先の魔術を発動させた後、オルナは休む間もなく即座に次の行動に移っていた。

刻一刻と変化する世界を知覚し、延長させ、固定させる。津波のように脳に押し寄せ続ける世界の情報を必死で受け流し、そのなかで垣間見える必要知を決して見逃すことなく収集しなければならぬ。いつもは感情の乏しい彼女の貌が、苦悶の表情に歪む。

（……まだ……まだ……まだ……今！）

座標固定。彼の地との接続を開始……完了。自身を岐点として固定座標と彼の地との同調指数を索敵……想定誤差内。『通路』の設計、構築、固定化……すべて問題なし。

この一言で決着がつく。小柄な神官の真っ白いせがみ頤から、一滴の雫が大地に向かって落ちてゆく。

「有れ」  
瞬間、周囲の争いを知ることなく岩陰で眠る少女の目前に、三つの人影が現れた。途中過程の一切を省いたかのように唐突に現れた影は、オルナたちと同じ純白の制服に身を包んでいた。そしてその手に油断なく三叉の槍を構え、何らかの術により浮かぶ少女に向ける。

どこかで、誰かが、何かを叫んだ気がした。

三本の槍が、安らかに眠る少女の体を貫いた。

ほとんど自由にならない体を引き摺りながら、それでも彼は戦い続けていた。ただでさえ手練の四人も、それぞれ決死の覚悟で挑んできており、はっきり言って状況は最悪。

だがそれでも、この戦いは勝てると思った。負けるわけにはいかないと思った。

突然、少し離れたところに三つの気配を感じる。それは彼の、唯一にして最も大切な者のすぐ傍だった。どうしてそうなったのかわからないし、わかる必要もなかった。その服装から、新たに現れた者たちも敵なのだと判別できる。敵が少女の傍にいる。なら自分は彼女を護るだけだ。

寄ろうとした。彼女を救おうとした。  
だが、周りの者たちが邪魔で近づけない。すぐにも地に伏してしまいたいようになる体が、駆けると言っても応えてくれない。

護らなくては。いかなるものからも、護らなければ。

それなのに。

それなのに。

自由になるのは言葉だけ。できるのは叫びだけ。

言葉だけじゃ、彼女は救えない。救えないのに。

自由になるのは言葉だけ。

「——つつつレエエエエイ!!」

大勢決した戦場に、エンデュミオの叫び声が木霊する。大地を揺るがすほど大きな声が、悲しく、遠く、木霊する。

そのオトのなかで、少女は体を貫かれた。胴の三箇所から、その髪と同じ色が徐々に徐々に広がっていく。体中から急速に生気が失われていく。

彼女の口から大きな血の塊が吐き出された。それとともに、薄っすらと瞼が開かれる。

「レイっ!!」

今すぐ傍に行かなくてはいけない。彼女の味方は自分ひとりしかいないのだから。

なのに、周りの者たちが邪魔で身動きが取れない。すぐ近くに境界線があるのに。自分たちと外界を分かち、境界線があるのに。

何人も入れさせないと決めた境界線のなかに、敵がいる。自分が今どんなに剣を振るっても近づけない境界に、敵がいる。

この十数歩が、こんなに遠いなんて。

剣を取り落とし、愕然と膝を地につけた彼は見た。彼女の目がゆつくりと開くの。

その視線は、まっすぐこちらへと向けられていた。血に塗れた体で、すぐにでも頽れそうな体で、それなのになぜか彼女は微笑んでいた。

自分がもう言葉を発せないことに気づいているのか、端に血泡をつけた唇を、ゆつくりと大きく動かす。

『も・う・た・た・か・わ・な・い・で』

唇の動きを読み取った彼は、驚愕に目を見張った。いくつもの感情をその貌に表しながら、少女は続ける。

『し・あ・わ・せ・だ・っ・た・か・ら』

『ほ・ん・と・に・た・の・し・か・っ・た・か・ら』  
そこまで伝えてまた吐血する。もう死は間近に迫っていた。青白く染まりながら、それでもなお彼女の笑顔は美しい。

美しかった。

最期の言葉と共に、彼女はゆつくりと瞳を閉じる。頬には涙の筋ができていた。

人に憎まれ、世界に拒絶され、故郷から遠く離れた地で世界のために殺された少女。

その彼女の最期の言葉は。

『あ・り・が・と・う』

「うううううおおおおおおおおおおおおつっ!!」

辺りに、慟哭の音が轟く。

さっきまで己の死をも覚悟していた教皇庁の兵士たちは、まるで魂を抜き取られたかのように呆然と座り込んでいた。どこからも、世界を救ったという歓声はあがらない。ただただ無言で佇むのみだった。掠れた声を響かせながら、辺りの空気が徐々に風いでいく。

暁天のなかで、大気の上を轟々と音を響かせて雲が動いていた。高く遠い空にはきつと、強い風が吹いているのである。崩壊を留めた世界を祝福するように、天も地も新たな黎明に歓喜しているようだった。一人の少女が果てた、この世界の幕開けに。

唐突に。まるで荘厳なる大気に押し潰されたように、叫び声が止んだ。

何とは無しにそちらに視線を向けた面々の目に映ったのは、懐から取り出したナイフを自らに突き立てようとする男の姿だった。束縛の魔術が切れてしまった今、その動作は一切の淀みなく実行される。

誰一人として反応できない刹那、  
彼はそのナイフを自分に向け、  
目を閉じ、  
そして。

直前で、止めた。  
首筋ぎりぎりのところにあるナイフの刃が、ぶるぶると小刻みに震えていた。

だが、その制止に誰よりも驚いたのは、他ならぬエンデュミオ自身だった。

体がまったくいうことを利かない。さっきのように動きに枷をつけられる感覚ではなく、まるで人形のなかに意識だけ入ってしまったかのように、自分の体が一切の命令を受け付けない。

「……今までの貴方ならいざ知らず、寄る辺を失った今の貴方の精神に介入するのは容易いこと」

天から声が降ってきた。声の主は固まった青年の隣にゆっくりと着地する。

「これで世界が平和になるわけではありません。ただ崩

壊を免れたというだけのこと。我々はこれからこの世界をあるべき姿に戻さねばなりません」

それは自分と、仲間たちと、そして死にたがりの騎士に向けられた言葉。

「貴方のその強大な力、ここで失うのはあまりにも惜しい。世界を破滅に導こうとしたその力、世界再生のために使う気はありませんか？」

ほんの少し高い視線から、膝立ちするエンデュミオの瞳を見下ろすオルナ。彼の眼球は、眼窩から零れ落ちそうになるほど忙しなく動いていた。

言葉を発せない彼の言葉は、その精神を掌握しているオルナだけに伝わる。

「……やはり、そうですね……。ですが、その希望通り楽にさせる気はありません。

記憶を、書き換えさせていただきます。本来私の専門はこちらです。記憶が戻るなどという不調法はありませんから、その点に関してだけは、どうかご安心を」

オルナの、燐光を放つ右手が黒髪への伸びていく。血走った目が、必死に心中を訴え続ける。

殺せ。

殺せ、殺せ、殺せ。

殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ。

殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、

殺せ、殺せ、殺せ、殺せ！

あいつが、神に見放されて天国に行けなかったとしても。今死ねば、罪深い俺はあの世でもきつと、あいつと共に在れるから。

あいつがいないこの世界で、生きていく理由なんて見つかからない。あいつが犠牲になった世界でなんか、生きていたくないから。

だからどうか、この俺を。たったひとりのために世界を裏切ったこの俺を。今、ここで、

『コロシテクレ』

「さようなら、エンデュミオ・ハサルウエイ。どうかせめて、貴方の夢が幸福でありますよう」

「続」